

五十肩の超音波診療

平成になって、急速に運動器エコーが普及しました。今回は、X線時代から超音波時代への大転換をもたらした「五十肩に対する超音波診療」について解説します。

【症例】80歳女性。主訴は右肩痛で、半年前から痛く、徐々に着替えがづらくなってきた。最近では右肩を下にすると寝られない。過去に肩痛の既往はない。

【所見】右肩の腫脹・熱感および三角筋・棘下筋の萎縮はなし。頸伸展での肩痛誘発なし。右肩は自動・他動挙上130度で痛みを伴う。

『まず、レントゲン。』
昭和の常識

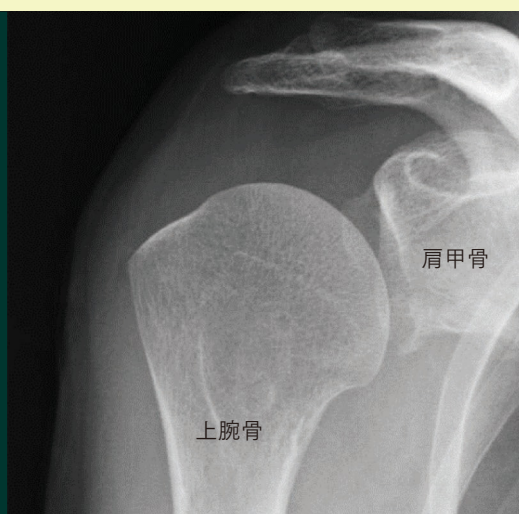


図1 | 右肩単純X線正面像

研修医：骨には異常ありません（図1）。診断は「五十肩」でしょう。消炎鎮痛薬を処方しますね。
あなた：80歳なのに五十肩!?ちゃんとエコーはやったの?
研修医：やっていません……。
あなた：キミの診療スタイルは“昔の常識、今では非常識”だよ。

問題

中高年の肩痛（五十肩）診療で、令和の“非常識”はどれか？

- (A) まずX線写真を撮る。
- (B) 必要があれば超音波検査をする。
- (C) 五十肩は病名である。
- (D) 自然に治るので放置してよい。

答え (A)～(D) のすべて

五十肩～江戸から昭和の常識、令和の非常識～

「五十肩」は江戸時代に使われた俗語で、別名「長命病」とも呼ばれた(太田全斎『俚言集覧』、江戸時代)。整形外科のバイブル『神中整形外科』(神中正一、1940年)には、“病態が明らかでないから、やむをえず五十肩を病名として採用した”と記載されている。また、肩関節外科学のバイブル『肩—その機能と臨床』(信原克哉、1979年)には、“五十肩を病名として使うべきではない”と明記されている。このように、五十肩は俗語であり、病名として不適切な用語であることを先人たちが指摘してきた。

ほとんどの肩関節疾患は、主病変が軟部組織にある。そのためX線検査では中高年の肩関節疾患全体の10%しか診断できないのに対し、超音波検査ではほとんどすべての肩関節疾患を瞬時に診断できる。画像診断が

【五十肩のエコー設定】

プローブ：高周波リニアプローブを使用。

携帯エコー：リニアプローブが使用できれば評価可能。

“X-ray first”から“US first”へ変わってきた背景である。診断できなければ治療もできない。平均寿命が50歳に満たなかった江戸時代の常識は、平均寿命80歳を超える現在では非常識である。

知っておくべき肩4大疾患

腱板断裂

肩甲骨と上腕骨の連結部が肩関節(肩甲上腕関節)であり、この肩関節を包むのが腱板である(図2、動画1)。腱板に穴が開いた状態を腱板断裂と呼ぶ(図3)。腱板断裂は棘上筋腱の大結節付着部に始まり、後方の棘下筋腱または前方の肩甲下筋腱へ断裂が拡大する。

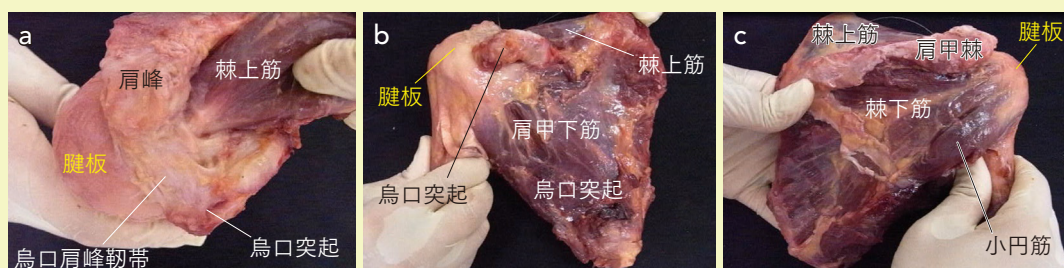


図2 | 腱板の解剖(動画1)

上方(a)・前方(b)・後方(c)から見た右肩。腱板は棘上筋・棘下筋・小円筋・肩甲下筋の共同腱で肩関節全体を覆う。



動画 1a



上方から見た右肩腱板

<https://me.igaku-shoin.co.jp/e07-1a>



動画 1b

前方から見た右肩腱板



<https://me.igaku-shoin.co.jp/e07-1b>



動画 1c

後方から見た右肩腱板

<https://me.igaku-shoin.co.jp/e07-1c>



(2023年9月30日まで公開)